

巻頭言

ちょっと気にかかる

奥居 紀子（立命館高等学校講師）

「頭は茶髪、バックにはポケベル、テレクラも経験あるし、中には援助交際”だって」。こんなイメージがマスコミで踊る「いまどきの中学生、高校生」に東京都がアンケートをし、その結果が新聞に発表された。

全体の24%が携帯電話を持ち、髪の毛を染めるか脱色し、スリルをもとめてテレクラに電話したものが70%、・“援助交際”にいたっては3%と出た。この社会現象と数字に驚くまでもないのだが、毎日生徒に接しているのに、彼らもっているものがわからなかったり、考えていることが見えないと思うことがある。服装や持ち物は、「これがいまどきのファッションだ」と言われれば、「そうか」とジェネレーションギャップを再確認するだけだ。いつの世も、年齢が違えば好みも違って当然。気にすることはない。

ただ駅や町で見かける若者たちが、体を支えかねてへたり込んでいる様子や、教室では生徒が、軟体動物のように、背筋をグンニャリさせて机に突っ伏しているのを見ると、いったいに元気がないのが気にかかる。同じアンケートで、全体の8割が学校生活を楽しいと思い、7割近くが自分の家に生まれて良かったと感じているのだと示している。「学校は窮屈なところだとだれもが思っているのでは」と、先日、ある教育社会学の先生の話に出てきた言葉を思い出した。逆の2割、3割の数字の意味は大きくないか。食べる物や着る物に困る時代ではないから大変気にかかる。教師たる者、親たる者いったい何をしていることになるのだろう。

さて帰国生のこと。学校訪問をし、帰国主に会うのはとても楽しみなことである。おおむね元気はつらつ、揺るぎない自分の意見を話してくれる。背負い切れない程の異文化経験は、きっと子供たちを大きく成長させてくれるだろうという予感がある。

ところで、先日ある帰国生を集めた語学教室で目にした光景はショックだった。講師が質問をし、応答を期待しようと、発言を促そうと、押し黙ったまま。帰国一年以上経った高校生のグループだという。「帰国生＝英語に堪能＝いつも明るく自己主張」という公式が成り立たないことなど百も承知だ。加えてそれぞれの個性だって、おしやべりもいれば無口もいることだろう。陽気な時もあれば、沈んでいたい時もある。そんな生徒たちがたまたま集まったのかも知れないとは思った。

しかし、「今の生徒たちの最大関心事は、仲間から浮かないようにすることなのよ」と同僚から聞いて、あのだんまり風景はその努力の果てではないだろうかと気にかかったのである。

学校設備の整備や組織や制度の改革など、入れ物や回りをかためること、すなわちハード面での充実が、学ぶ環境を生み出す大変な努力であるのに異論はないが、その間を埋めるのは人”なのだとつくづく思う。親は日々生活する場で子供のことを、教師は日々接する児童や生徒のことを、企業は人を論じてこそが、教育の原点であろう。違った目の高さから見た「ちょっと気になること」は違う立場のヒントになるかもしれない。

この「帰国子女教育を考える会」は、教師・親・企業・研究者というそれぞれ違った立場の人の情報を交換しあい、刺激しあう場でありたいと願って発足した。研究会とか研修は専門色の濃い印象があるが、いろいろな立場で見たこと、感じたこと、体験したこと、試みたことの発露の場でありたい。

裾野を広く、と心がけることも大切な役割かと思う。